

後撰和歌集注釈 — 卷二 春中 (1) —

実川 恵子

序言

一、本稿は研究会活動による成果の一部である。
二、本研究会は、井川健司・井川裕子・門倉浩・久保木寿子・実川恵子・内藤明・吉川栄治の七名で構成し、各巻分担方式による『後撰集』全巻の注釈を目標とする。

一、注釈が完了している四季部の内、春上・秋中の六巻について、以下の各誌に順次発表してゆく予定（巻号は未定）。

卷一 春上…『白梅学園短期大学紀要』

卷二 春中…『文教大学女子短期大学紀要』

卷三 春下…『滋賀大國文』・『滋賀大学教育学部紀要』（春下(1)

は、『滋賀大國文』第三十二号・一九九四年六月掲載）。

卷四 夏…『早稲田大学人文自然科学研究』

卷五 秋上…『明星大学研究紀要』— 日本文化学部・言語文化学

科—

卷六 秋中…『古代研究』（早稲田大学）

凡例

【底本】高松宮旧藏天福本を用い、日大為相筆本により補訂。

なお、単行本として刊行の際には定家自筆時雨亭文庫本に差し替える予定。

【表記】

1 仮名遣いは、底本の表記を改め歴史的仮名遣いに統一した。付属語の「ん」「らん」「けん」「なん」は「む」「らむ」「けむ」「なむ」に統一。また、「梅」は「うめ」、「馬」は「うま」を用いる。

2 送り仮名は、「給（へ）る」のように通行の送り仮名を補う。

3 踊り字は本来の文字に改め、底本表記は右括弧中に傍記。

4 漢字仮名表記は原則として底本のまま。ただし、付属語の漢字表記・宛字・異体字・固有名詞の誤字や宛字は改訂し、底本表記を右括弧中に傍記した。

5 連語の略表記については、固有名詞として略表記の定着したもの（「寛平御時」等）や送り仮名の省略が慣用化しているもの（「歌合」等）を除き、「梅（の）花」のように本行中に補う。

【勸物】

底本には処々に定家書き入れの勸注がある。当該箇所には「勸」記号で位置のみを示し、勸物本文は直後の「勸物」欄に示す。

【朱注】 底本には行成筆本による校異が朱で書き込まれている。当該箇所には「朱」記号のみを傍記し、「朱注」欄にその本文を示す。

【校異】 底本とは系統の異なる代表的伝本六種による校異を示す。

1 本文当該位置に番号を傍記し、「校異」欄にその本文を示す。

2 底本にない本文は見出しを付けず「〇〇アリ」とする。

3 底本にあつて校異本にない本文は「〇〇ーナシ」とする。

4 句順前後は「〇〇〇〇ー〇〇〇〇上(下)ニアリ」のように処理する。

5 同一異文内における校異諸本略号の掲出順は、底本との親疎による。序列は次項参照。

6 諸本の略号は次の通り。

中院本(中)・承保三年本(久)・雲州本(雲)・堀河本(堀)・片仮名本(片)・二荒山本(荒)

【出典】 1 歌集名は、『万葉』『古今』『六帖』のように略号を原則とする。

2 歌合名は、原則として『歌合大成』に従う(年号は略)が、寛平后宮歌合については通称に従う。

3 『後撰集』は「本集」と記す。

【作者】 『後撰集』の和歌作者については、刊行時に作者略伝を付す予定なので、当面の注釈対象とはしていない。詞書中に出てくる人物で注の付されていないものは本集作者である。

【諸注】 参考とした注釈と略号は以下の通り。その他の歌学書は原題のまま引用。

『聞書注』……………藤原為家? 『後撰集聞書注』

『正義』……………昇蓮? 『後撰集正義』

『抄』……………北村季吟 『後撰集抄』

『雑考』……………契沖 『契沖雑考』

『口訣』……………北村季吟 『後撰集口訣』

『増抄』……………萩原宗固 『後撰集増抄』

『つかね緒』……………本居宣長 『後撰集詞のつかね緒』

道麿『疑問』……………田中道麿 『後撰集疑問』

磯足『疑問』……………加藤磯足 『後撰集疑問』

『新抄』……………中山美石 『後撰集新抄』

『標注』……………岸本由豆流 『後撰集標注』

『講義』……………佐佐木信綱 『後撰集講義』

『選釈』……………久松潜一 『八代集選釈』

『評釈』……………久松潜一 『八代集選釈』

『秀歌』……………窪田空穂 『平安秀歌』

『名歌選釈』……………岸上慎二 『平安名歌選釈』

(昭三九・七『国文学』)

『鑑賞』……………杉谷寿郎 『後撰和歌集』

『全釈』……………(角川鑑賞日本古典文学7所収) 木船重昭 『後撰和歌集全釈』

『大系』……………(笠間古典注釈叢刊13) 片桐洋一 『後撰和歌集』

『叢書』……………(岩波新古典文学大系6) 工藤重矩 『後撰和歌集』

……………(和泉古典叢書3)

春

①中

としおいてのち、梅^③花をうゑて、あくる年の春おもふ所ありて
藤原扶幹朝臣^⑥勳

47 うゑし時花見むとしもおもはぬにさきちる見ればよはひ老^⑦（ひ）にけり

【勳物】 大納言按察天慶元七月薨七十五

【朱注】 歌

【校異】 ①歌アリ（久） ②としおいてのち―としおいてののち（久）

③梅の花―梅の木（中久堀） ④所―こゝろ（中久片荒）こと（堀）

⑤ありて―アリテヨメル（片） ⑥藤原扶幹朝臣―□のすけとも

（荒） ⑦おもはぬに―おもはずに（堀） ⑧さきちる―サキケル

（片） ⑨よはひ老いにけり―よくおいにけり（久）よはひへにけり（堀）

【語釈】 ○さきちる見れば―翌年梅の花が咲き、そして間もなく散るのを見ると、という開花から落花への早さを表現する。

【訳】 老後に梅の花を植えて、翌春心に思うことがあって、

かつて梅の木を植えた時には、花を見るだろうとも思わなかつたのに、翌年花が咲き、そして散るのを見るとかえつて老いを感じてしまったことだよ。

【評】 梅の木を植えた時には、まさかその花を見ることはあるまいと思っていたのが、花が開き、そして散る、という、あつという間の生滅の展開に、また一段と老いを感じてしまったという感慨を詠じている。

『新抄』に類歌として、「植えし時花待ち遠にありし菊うつろふ秋

にあはむとや見し」（『古今』秋下、二七一）を掲げるが、この歌は、待った時間の長さに対して、満開の菊を眼前にその盛りの短さという矛盾を基調に、衰えていく花を惜しむ気持を詠う。当歌も、この類歌も時間的変化がつけられて詠まれたという点では共通しているが、詠歌の視点では相異している。

なお、『大系』は当歌の「よはひ」の語の「思いもかけぬ長寿によつて花の生きざまを確認出来たよろこび」に主眼を置いた詠歌として捕え、むしろ雑部にあつてもよい歌とする。本集では当歌を巻頭に据えた意図は、【語釈】に掲げた「さきちる見れば」の梅の花の開花から落花の早さを、老いの感嘆にたぶらせたところにあるのではなからうか。

ねやのまへに竹^②のある所にやどり侍^①（り）て

藤原伊衡朝臣^④勳

48 竹ちかくよどこねはせじ鷺^⑤のなく声きけばあさいせられず^⑥

【勳物】 ①延喜十六年右少将七年藏人延長三四位同十月中将 ②延長八年正四下兼内藏頭承平四参議七年右兵衛督

【校異】 ①まへ―まへちかく（荒片） ②竹のある―竹ある（中承堀片）

③やどり侍りて―ね侍りて（堀） ④藤原伊衡朝臣―ふちはらの□（荒）

⑤よどこね―よどこね（荒） ⑥あさい―□（荒）

【語釈】 ○竹ちかく―竹が植えてある近くに ○よどこね―よどこねは、夜床、寝床の意。「よ（節）」と「ね（根）」はともに竹の縁語。『無名抄』に「よどこねはせじといひ・あさいせられずといへる。すがたことばよろしからず」、『僻案抄』に「よどこね。よるふすと

こ。あらはにきこゆ。朝いせられず。藝なる詞なれど、ふるき歌は、たゞありとよめれば、かやうの事おほかり」とある。例歌に、「たになづく柔膚すらを剣刀身に副へ寝ねばぬばたまに夜床も荒るらむ」(『万葉』卷二、一九四)、「旅ねする夜床さへつつ明けぬらし外方ぞ鐘の声きこゆなり」(『金葉』冬、二八七)。○あさい朝寝。

【訳】

寝室の前に、竹が植えてある所に泊まって、

竹の植えてある近くに夜床をとって寝るのはもうしまい。早朝、その竹にやってくる鶯の声を聞くと朝寝どころではないから。

【評】竹の植えてある近くに寝所をとると、鶯の飛来でゆつくりと朝寝も出来ない、といった不満を述べるかのようにして、実はその絶妙な風情を満喫し、その喜びの様を詠じている。

この竹に鳴く鶯を詠んだ例は、『万葉』に「梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも」(卷五、八二四)や、「御苑生の竹の林にうぐひすはしば鳴きにしを雪は零りつつ」(卷十九、四二八六)があるが、いずれも単純な叙景歌である。平安朝の和歌にはその例歌は少ないが、『古今』に「世にふれば事のはしげきくれ竹のうきふしごとに鶯ぞ鳴く」(雑下、九五八)は、『万葉』歌のような単なる景物素材としての組み合わせではなく、技巧の複雑な詠歌である。

当歌は、『俊頼髓脳』「秀歌等の例」に、花や月を賞した例歌に続いて載せ、新奇な詠法とする。

やまとのふるの山をまかるとて

49 いその神ふるの山べの桜花うゑけむ時をしる人ぞなき

僧正遍昭

【校異】①まかるとて―とほりけるに(堀)まかれるとき(荒)マカルトキ(片) ②しる人ぞなき―しる人のなき(堀)

【語釈】○ふるの山―ふる(布留)は、大和の地名。天理市石上神宮の背後の山をいう。○まかる―単なる通過の意と、高貴な人の所や場所から退出する意があり、ここでは後者の意。○いそ

のかみ―地名(歌枕)。現在の奈良県天理市石上付近。『紀』によれば、安康天皇の石上穴穂宮、仁賢天皇の石上広宮があった(石上

ふるき都のほととぎす声ばかりこそ昔なりけり)『古今』夏、一四四)。

和歌においては、「石上」は、同地の一部である「布留」(石上

神社のある所)に連ねて用いられ(「石上振の山なる杉群の」『万葉』

卷三、四二二・「石上振の尊は手弱女の」同、卷六、一〇一九・「石

上振の早稲田の穂には出でず」同、卷九、一七六八)、やがて枕詞化

する(「石上布留の中道なかなに見ずは恋と思はましやは」『古今』

恋四、六七九)。また、「布留」が「降る・振る・古る」と同音ゆえ、

「石上」はこれらの枕詞となる(「石上零ともに雨に障らめや妹に逢

はむと言ひてしものを」『万葉』卷四、六六四・「吾妹や吾を忘らす

な石上袖振川の絶えむと思へや」同、卷十二、三四三・「夜のまに

はやなぐさめよいその神ふりにしとこもうちはらふべく」『本集』恋

三、七五六)。○うゑけむ時―桜の花は、今を盛りと咲いている

が、かつての都である布留の地に桜を植えたその時代の様子。

【訳】大和の布留の山を退出するといふので、

石上の布留の山辺の桜花は、その地の名のように古くて、この桜をいつたいいつ植えたのか、昔の都のありさまを知る人はいないことだ。

【評】石上の布留の山辺の地を、退出する時の惜別の情を詠じたものと思われる。『大系』は、「知る人ぞなき」に触れ、『古今』秋上、卷末歌、二四八の詞書の記述に遍昭の母が布留の地に在住したこと

に関連させ、母への思慕を含ませた語句と読みとる解が示される。

また、当歌を本歌として詠出した源通具の「石上布留野の桜たれ植へて春は忘れぬ形見なるらむ」(『新古今』春上、九六)は、本歌の「山辺」を「野」とかえ、懐古の情と桜の花の艶を本歌以上に表現している。

花山にて道俗さけらたうへけるをりに
素性法師

50 山守はいはばいはなむ高砂ののをへの桜折(り)てかざさむ

【校異】①花山―山(片荒) ②道俗―ほうしそくあつまりて(片荒)

③さけら―さけ(中堀)サケナム(片)さけなと(荒) ④

たうへけるをりに―たうへける時に(中久)たうへけるに(荒)

【語釈】○花山にて―遍昭が創建した花山寺の地。京都市東山区山科北花山にある。○道俗―僧侶と俗人。○たうへける―たうぶは本集四五参照。○山守―山を守る人、山番。○いはばいはなむ―文句を言うなら言うてほしい。○高砂ののをへ―特定の地を意味して、兵庫県南部、加古川西部の地を示す場合と、砂が高く丘のようになった所や高い砂丘、山のことを総称している。

【僻案抄】に「高砂播磨の名所なれど、すべて山をば高砂と云一説也」とあり、この場合も一般的な山の意ととるのが妥当であろう。「のをへ」は、山の頂、峰の意。○かざさむ―冠や頭に挿そう。本集四五参照。

【訳】花山の地で、法師、俗人が入りまじって、酒を飲んだ折

に、山守が、文句を言って咎めたければ咎めても良い。峰に咲い

たこの桜を折って頭に挿そう。

【評】桜を春の景物として耽美した措辞であろう。詞書に示す如く、素性法師が「花山」の地で桜の花を折っての詠歌とすると、「高砂の尾上」という地名は、播磨に位置する事実と矛盾する。平安朝の和歌では、地名「高砂」と特定できるものは稀で(『平安朝歌枕索引』、「高砂の尾上」は「正義」、「新抄」に示す如く、「高砂」を山の意とし、「尾上」は尾の上、つまり峰と普通名詞的に理解するのが妥当であろう。

おもしろきさくらををりて、ともだちのつかはしたりければ
よみ人しらず

51 さくら花色はひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

【朱注】いと

【校異】①いとアリ(中久雲堀片荒) ②もとにアリ(雲)もとへアリ(堀)カリアリ(片荒) ③ひとしき―ひさしき(久)

【語釈】○おもしろきさくら―この「おもしろき」は、色合・咲き具合が格別にはなやかで風情があること。枝ぶりや形状に変わった見所があるの謂ではない。大系『万葉集』一〇八一補注によれば、「オモシロとは、やはり面・白の複合語で、元来、目の前がパツと明るくなる感じをいう語のよう」で、「眼前の光景・風景についていうことが多い」、即ち、心情語ながら対象の状態を特定する語である。桜の例(本集九三・『勢語』八十二・九十段)では不明瞭だが、「宇多院の花おもしろかりけるころ」(『大和』八十段)・「花おもしろくなりなば必ず御覧せん」(同九十段)を参考にすれば、大体において

満開時の状態を指すと見てよいようだ。『古今』及び本集の「おもしろし」の用例にあたり、それぞれに七例中四例・九例中五例が「月」に対して使われているが、これもまた「満月・明月」の義と考えられる。要するに、見る側にばつとした印象を与えるような、その景物固有の美が最大限に発現した状態への形容詞であろう。○と

もだちのつかはしたりければ―「ともだち」は次歌五十二の作者伊勢(雲州本以下四本の本文では当歌の作者自身ともとれる)。例によ

つて『つかね緒』が「此かへし伊勢なれば、いせがとこそあるべきに、友だちとのみいへるは、例のたがへり。又おこせといふべきを

つかはしといへるもわろし……つかはすとは他へやるをこそいへ」と疑義を呈しているが、この内、後の方の疑問について述べると、

相手からの行為に「つかはす」を用いる例は、『古今』には一例(恋四・七〇五)しかないものの、本集では珍しくなく(六八・四九・

三九四・四三六・六四〇・七二・八三八・八七二・九八〇・一一・一二一八・二二六九等)、むしろ「おこす」よりも多用される

傾向にある。これは『拾遺』でも同様で、詞書の人称という観点からの説明も可能であろうが、基本的には、本集の三五〇弱という数字

字に見るような、歌集詞書における「つかはす」の使用頻度の高さが、次第に「おこす」との混乱を生じさせ、その代用とさせるよう

になった結果と思われる。○色はひとしき―何とひとしいかに

ついて、(1)世間一般の桜と「桜はいづれもひとしくかはらぬ枝なれど」『抄』、(2)相手の面影・容姿と「今かくをりておくり給へる此

桜花を見れば、うるはしく世にすぐれたる色あひ枝つきなれば、君とひとしくなすらへられて」『新抄』、(3)一人で見るときとあなたと共に

に見る時と、(4)形見と見る時とそうでない時と、の四通りの解が考えられる。この内、(1)(3)は、歌の表面に全く浮かんでこないものを対象とすることになり、(2)は下句との関係に無理を感じる。確定は

難しいが、四句に歌の強調点があると見て、(4)の解を取っておく。

○かたみに見れば―形見として見ると。「かたみ」は故人のそれではなく、「恋しき人の形見」(『古今』恋四、七四三)・「逢ふまでの形見」(同・七四四・七四五)。「夢をだにいかでかたみに見てしがなあは

でぬる夜のなぐさめにせむ」(『拾遺』恋三、八〇八)。

【訳】 みごとな咲きぶりの桜を折って、友だちがよこしてきたので、

この桜の花、色はどう見ようとかわるわけもないけれど、あなたの面影を偲ぶよすがと思つて見ると、(最近ご無沙汰だから)気が沈んでしまいます。

【評】 作者は伊勢の女友だちであろう。歌は第二句の解釈が微妙で、しかも第四句と結句との間に飛躍があるため、解しづらいが、「枝なれど」「見れば」の接続を重視すれば、右のような解になる(訳文括弧中の部分は、次歌の初句「見ぬ人」をも参考にしている)。伊勢が友人としての情宜から折つてよこした桜の枝を「形見」と見ること

によって、逆にその無沙汰を責める歌としていのである。

返^① 見ぬ人のかたみがてらはをらざりき身になすらへる花にしあらねば

ねば

伊勢

【校異】 ①返し―返事(雲) ②の―を(雲堀荒)ニ(片) ③な

ずらへる―なそらへる(雲片)なすらへる(久) ④花にしあらねば―いろにしあらねは(久)花にあらねは(雲)イロニサカネハ(片荒)

【語釈】○見ぬ人―(1)あなたが見ない人(私)、(2)私が見ない人(あなた)、(3)私の家の桜を見ていないあなた、の三解が考えられる。「桜花手折りてもこむ見ぬ人のため」(『古今』春上、五四)・「吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり」(同、恋一、四七五)・「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくは」(同、四七六)・「見ぬ人を思ひやりつつ恋しかるらむ」(本集、恋二、六〇四)は、全て相手を目指す、当歌に限っては次句の「形見」との修飾関係を見た場合、あなた(が私を偲ぶため)の「形見」と解するのはいかにも苦しい。一応自分のことを客観的に言ったものと見るが、単に両者の往き来の絶えている事情を表出する措辞とも考えられる。なお、『大系』『叢書』は、「お逢いできないあなた」、「全釈」は「暗に作者自身を指す」とし、当解釈と同様。○かたみがてら―「がてら」は、他の動作をも兼ねて行う義を添付する接尾辞(「わが宿の花見がてらに來る人は散りなむのちぞ恋しかるべき」『古今』春上、六七)。本集では他に一二三四のみ。「形見がてら」は、「形見に見てほしいという気持ちをごめつつ」(「我妹子が形見がてらと紅の八入に染めておこせたる衣の裾も通りて濡れぬ」『万葉』卷十九、四二五六)。○身にならずらへる花にしあらねば―わが身に等しい花ではないので。四段動詞「なずらふ」は「比偶する・同質の」の意(「帰ってくる道にぞけさは迷ふらむこれにならずらふ花なきものを」『雑三』一二二二)。完了「る」の贈花の時点を表す。

【訳】 返歌、

久しく逢っていない私を偲ぶすがにでもと思って折ったのではありません。わが身にくらべられる花ではないのですから。

【評】相手の恨みっぽい言いかけを、「花といっしょにできるような我が身でもないのに、形見だなんてとんでもない」とさらりと受け

流した、典型的な贈答の型を踏む。「形見」・「見ぬ人」といった恋歌的範疇の措辞によって、実際には頻りと往き来していたであろう同性間のやりとりながら、一種疎遠をかこつ恋歌めかした贈答に仕立て上げたところに、友人同士の気易い応酬―「遊び」を感じさせる。「伊勢集」にも、両首同じような詞書で収められているが、伊勢の日常的な交友の一端を窺わせる一組である。

① さくらの花をよめる

よみ人しらず

53 吹(く) 風をならしの山の桜花のどけくぞ見るちらじと思へば

【校異】①の花―ナシ(中久) ②よめる―ナシ(荒)

(雲) ④ならしの山―ナラシノ山(片)

【語釈】○吹く風をならしの山―「吹く風を」は掛詞的に次句を導き出すが、【評】に述べるように、本旨に密接に関わってゆくところから、機械的に枕詞とするのはためらわれる。二句への係り方としては、「馴らし」とも「無らし」とも取れるが、「を」の働きからすれば、表現上多少の異和感は拭えぬものの、やはり前者とすべきであろう。「吹く風をおさえ馴らす山、ならし山」の意。なお、ならしの山については、土佐・大和の両説がある。即ち、『能因歌枕』(土本)が土佐とする外は、『五代集歌枕』が「土佐 私云、此岡(ならしの岡)在大和国」歟。作例尤多(上巻)、また『八雲御抄』も「土佐 若大和歟、可尋」と決めあぐねているが、「故郷の奈良思の岡のほととぎす言告げ遣りしいかに告げきや」(『万葉』卷八、一五〇六、田村大嬢が坂上大嬢に与えた歌)の「奈良思の岡」を同一のものとするれば、大和説が指示されよう。「この夏もかはらざりけり初声

はならしの岡になく郭公(亭子院歌合)・逢ふことはならしの池の水なれやたえみたえずは年のへぬらん(『六帖』三)等の例が見える。因みに、『万葉』卷十、一八二二「我が背子を莫越の山の呼子鳥君呼び返せ夜のふけぬとに」の二句を『拾遺』で「ならしの岡(恋三、八一九。『赤人集』にも「ならしの山」で出る)とすることから、「なこしをなだらかに書たるを、後の人ならしと写なせるなるべし……今の歌(当歌)も、風をな吹こしそといさむる山の名なれば……」(『新抄』所収契沖説)との見方もあるが、先に上げた「ならしの岡(池)」の歌と並行して、「なこしの山」を詠む歌が、亭子院歌合『能宣集』・『六帖』には見え、莫越山の所在を東国とする資料もある(大系『万葉集』一八二二補注参照)ので、両者は別のものと考えねばならない。○ちらじと思へば―地名が「ならしの山」、つまり花を散らす風を「馴らし」てくれるはずの山の桜だから散らないだろうという理屈である。

【訳】 桜の花を詠んだ、

吹く風を鎮めてくれる、そんな名のこのならしの山に咲く桜のんびりと見ることだ、散ることもあるまいと思っから。

【評】 歌は単に地名を巧みに消化しただけの景物詠で、音声からの連想を基とした「理」によって一首をなしていることは、

雨ふれど露ももらじを笠取の山はいかでもみちそめけむ

(『古今』秋下、二六一)

等と変わりがない。ただ、当歌の特徴は、初二句の枕―初枕の結合が直ちに全体のモチーフに連絡する点であり、この点において、雨ふれば笠取山のみち葉はゆきかふ人の袖さへぞてる

(同、二六三)

等と同様、一首の意味構造の中で初二句の結合が大きな位置を占め、「雨衣田簍の鳥」(同、雑上、九一三)・「君がさす三笠の山」(同、

雑林、一〇一〇)等の単純な枕詞式固着とは一線を画している。本集では、九一八「あふことのかたの」・一二五五「いつしかとまつちの山」が同様の例。

なお、よみ人しらず歌に詠物的詞書が付くのは、「古今」には見られない現象だが、本集では以後もしばしばある。その内例えば、二二九九―二四七「七夕をよめる」は二首、三二七―三三四「月を見て」は三首の記名歌を介在させており、これらが、決して作者を韜晦しているのではなく、素材による編集上の一括的処理にすぎないことを示すと思われる。従って、この詞書も、何らかの資料的根拠の在するものとは考えにくく、撰者の恣意的処置と見てよからう。

①前栽に、竹のなかにさくらのさきたるを見て

②坂上是則

54 桜花けふはよく見てむくれ竹のひとよのほどにちりもこそすれ

【校異】 ①前栽に―前栽の(中久片荒) ナシ(堀) ②竹のなかにさくらの―さくらの花のたけの中に(堀) ③さきたる―花さきたる(久) さける(堀片荒) ④見て―ナシ(堀片荒) ⑤よめるアリ(中久片) ⑥坂上―ナシ(片)

【語釈】 ○くれ竹のひとよ―「くれ竹の」は実景を促えた枕詞。「竹のよ(節)」は「世」(竹の子のうきふししげきよ)『古今』雑下、九五七。本集では九〇七、九〇八、九二二、一二七三、一三八三・「夜」(「なよ竹のよ長き上に」『古今』雑下、九九三。本集では四八、一一八五)を導く両様のケースがあり、ここは後者。参考までに記すと、「くれ竹」は、淡竹あまのの異名(「淡竹……和名久礼多介」『本

草和名』十三)とも、カンチ「管竹のこと(『管竹……楊氏漢語抄云、呉竹也、和語云久礼太介』『倭名類聚抄』二十)とも、あるいはにがたけ「苦竹を指す(『苦竹 国俗呉竹ト云、又真竹ト云』『大和本草』九)とも言い、さらに、管竹と淡竹とは同種(『管竹 此亦与淡竹同、或云別種也』『和爾雅』七)とも説明される。名称の由来については、「初来_二於呉国_一而名_レ之乎(『和漢三才図会』八十五)と記されるが不明。特徴は、前引『倭名抄』『管竹』項に、「文字集略云、管似篋而節茂葉滋者也」、また『徒然草』二百段に、「呉竹は葉細く、河竹は葉広し」とある。『古今要覧稿』が、形状・伝来について詳しく考証している。

【訳】 植え込みに、竹の中に桜が咲いているのを見て、

この桜の花は、今日のうちにとっくりと見ておこう。たったひと晩の間に散ってしまうかもしれないから。

【評】 群竹の中に、幾本(あるいは一本ぼつんと)か桜が咲いているのであろう。桜はいずれは散るものだが、その散るのを惜しむ心持ちを、たまたま矚目される竹から「節」↓「夜」の音声的連想を引き出すことで、一首の眼目とした歌である。眼前の景の一要素を、純粹に言語的レベルに転位せしめた点に、この歌の機知があるが、一方、「もみぢする草木にも似ぬ竹のみぞかはらぬもののためしなりける」(『貫之集』)に見るような、竹にまつわる永久不変のイメージが、対照的に桜の移ろいややすさを際立たせるといふ用意をも、その場面設定の裡に汲み取ってよいかもしれない。少なくとも、竹と桜というのは珍しい取り合わせではある。